

無碍道は苦中に開く

様々な苦悩を訴える手紙が私の机上に積まれる。皆それぞれの事情のもとに、違った形の苦しみである。

しかし、訴えられる私もまたどうしようもない苦しみの波にもまれて生きているのだけれども、私自身の苦しみをすらも忘れて、苦しむ同胞のことが思われてならない。お互いに苦海に沈没せる身であるが故に、共同の問題として考えてゆこう。

いかにしたら、この苦悩の中に生きてゆけるのか。油断のならぬ苦海ではある。一難去つて一難来り、一苦過ぎて二苦三苦、果てしも知らぬ苦悩の世界である。この苦悩の為に己が世界は足元から崩れてゆく。この苦しみの中にいかに生きてゆくべきであろうか。

もちろんその根本は、如来金剛不壊の大信力によつてのみ解決するのではある。しかし、そこにはまた、それを妨げる様々な問題があり、心の声がある。私は今、静かに念仏しつつ、次のようにお答えする。

一。「こんな苦しみを私だけがしなければならぬとは何と馬鹿くしいことだ。」という心の声、もつともである。これは誰でもが持つ心であろう。この境遇に対する不平をどうすればいいか。だが考えて見よう。「馬鹿くしい」とは、どういうことであるか。それは苦しんでもそれに報いられないということであろう。無理もない。

しかし考えて見よう。そこには大きなまちがいがあつた。静かに念仏しつつ考えて見れば、それは「この世では荷物の軽い、楽に暮せた者だけが勝つたのだ」という、大まちがいが、その第一歩におかれてはいないか。荷物の軽かつた、楽に渡れた者が勝利者であるか。真に自己を成就した者が勝利者であるか。

巖上の松が風雨にさらされる。楽ではないに違いない。しかし彼が果して失敗であろうか。何もかも、彼の上に報いられて充分ではないか。因も縁も果も、自ら播いたものが実つたに過ぎないが故に、何でも起きて来たことは受け取るのが当然である。受け取つて更に求むべきではないのに、その当然のことを成就した者は、必ず世の光とさえなつていゝではないか。

念仏とは、無価値であるべき衆生の上に、久遠の真実なる大生命を打ち込んで下され、尊重なる一生として下さることである。されば見よ、過去の聖者は苦難によつていよいよ輝き、苦難によつて益々尊き生涯を成就していられるではないか。

一、「忍べと云つても程がある。もう勘弁ならぬ。腹が癒えるほど、やつつけてやりたさい。」人と人との経緯、仏のいわゆる怨憎会苦である。いかに多くの人がこの苦しみにやられてゐるかわからない。実に怨みより深く胸を焼く苦しみはない。

「しかし忍べ。」答えは簡単である。怨みの問題であるならば、私は敗けたい。もし仏様をお願いしてもよいものだと思つれば、私はみ仏に「仏様、我をして破れしめたまえ。我をして敗けさせたまえ。」とお願いする。私は限りなく私の父にひきつけられ

る。その原因の一は、父はいつも、何か事がおきた時、痛々しくも敗けて、沈黙してしまっていた。やがてひとり静かに念仏している父であった。

怨みの苦惱、その大部分は、敗けたことの口惜しさと、勝とうとする我慢が一人角力を取って苦しんでいるのではないか。この時ばかりは、忍べとは、敗けよと言うことである。私は私の魂に言つて聞かせる。「敗けよ。敗けよ。敗けて敗けよ。」世間では「敗けて勝て」と言う。私は「敗けて敗けよ」と言う。敗けて破れた灰の中から、念仏が生れる。それが、釈尊己来の忍の道であった。敗けてくれぬ我慢こそ、我が唯一の敵である。

「私は悪いことを致しました。その報いが来て、世間の嘲笑の的となつてしまいました。とても生きて行けません。いつそ死んでしまった方がましだと思います。」罪を犯した者の当然の心であろう。悪に対して厚かましくなるのは恐るべきことである。慚愧のない者は畜生だと経には言つてある。しかし、無漸無愧が畜生だと言うことは、死ぬと言うことではない。苦しい心はよくわかるが、決して自殺したり、人の知らぬ世界に逃避しなくてもいい。もつともつと深く自己の相に直面して、自分のほんとうの相に帰ることである。み仏の前に合掌して、悪人正機の大慈悲に徹しきることである。そこから、世のいかなる嘲笑にも値する自分がわかり、尾にヒレをつけた無理解な言葉にも沈黙して、ひたすらに念仏一道を歩みきる時、人生のどん底に秘められた、苦中の清涼味を知るであろう。

「私は貧しくて、子供があり、病弱で、先のことが心配でなりません。」と言う人がある。先のことを予想して苦しむことが流転相の一つである。私もまた、貧しい者の苦しさや不安は、ここ二十年一日たりとも廃業したことがない。どれだけ痩せ我慢出したところで、借金が出来はじめたりすれば、安心してはいられない。だがこの種の苦しみを持つ人に言う。

「念仏申して生きさせてもらおう。」体が動く問働こう。働いて念仏申そう。もし働くことが出来なくなつたら、恵まれるままを合掌して受けさせて頂かう、恵んでくれる人もなくなつたら、餓死をも覚悟しよう。下りることを嫌つたのでは、苦しみは二重になる。ただこの世は念仏申さるるよう過ぎて悔いなきに至れば、未来を予想しての取り越し苦労はなくなるであろう。

金剛不壊の真心に乗托して念仏しつつ苦悩に随順する者にのみ、苦悩の中にも永遠の無碍道が示される。これ人生に於ける唯一絶対の道である。